

# 公民としての資質・能力の基礎の育成を目指して

～「思考・判断・表現」の評価及び評価を指導に活かすための方策の検討～

北海道教育大学附属函館中学校 郡 司 直 孝, 山 下 尚 也

## 1 はじめに

中学校学習指導要領（2017年告示）における社会科の教科の目標として示される「公民としての資質・能力の基礎」は、「小・中学校社会科の目標に一貫した表現，社会科の究極のねらい」と説明される<sup>1)</sup>。そのため社会科では，生徒の「公民としての資質・能力の基礎」の育成の状況を的確に把握するとともに，その状況の改善やさらなる高まりに向けた手立てが講じられるような展開が求められる。

また，この「公民としての資質・能力の基礎」を育成するための手段として，「課題を追究したり解決したりする活動」が示されている。こうした活動は，社会課題を構成する社会的事象に関する知識及び技能を基盤としながら，「生徒が社会的事象等から学習課題を見いだし，課題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し，追究結果をまとめ，自分の学びを振り返ったり新たな問いを見いだしたりする方向で充実を図ることが求められる<sup>2)</sup>。特にこうした学習活動では，過程や成果において，生徒による記述が膨大に生成される。こうした記述に基づいた資質・能力の評価を適切に展開していくための方策や，評価を指導に活かすための方策を検討していくことが必要であると考えた。

以下では，本校社会科におけるこれまでの特に思考力・判断力・表現力等の育成に重点をおいた取組の経過を振り返り，今年度の研究の方向性を明らかにした上で，特に思考力・判断力・表現力等の育成に関する実践事例を論述する。

## 2 研究の経過

本校社会科ではこれまで，生徒による思考力・判断力・表現力等の育成を重点においた取組を展開してきた。特に，平成27・28年度国立教育政策研究所教育課程研究センターによる研究指定校として研究課題「問題解決的な学習を中核とする単元構成の工夫・改善」に取り組み，そのアプローチとして「『単元を貫く学習課題』の設定に基づいた指導方法等の工夫・改善」に取り組んだ。具体的には，単元という内容のまとまりを学習する際に，「問題解決的な学習を意図的・計画的に展開するためと，単元の指導目標と達成するために，学習者が単元を通して追究し続ける学習課題」<sup>3)</sup>である「単元を貫く学習課題」を設定するというものである。この「単元を貫く学習課題」によって，「学習者にとっては，同じ課題への自らの記述の変容によって思考力，判断力，表現力等の高まりを実感でき」，「授業者にとってはその高まりを的確に把握できる」という成果を得ることができた<sup>4)</sup>。

しかし，これらの実践はすべてワークシートへの記述によって展開されたものであった。そのため，記述された内容の交流が，基本的に当該生徒と授業者との間に限定されることが多く，他者との協議などによる多面的・多角的な考察の実現について，紙というメディアの限界をもつ実践となっていた。また，授業時間中での生徒が記述しているときにすべての記述された内容を把握することは困難であり，努力を要する状況

にある生徒に対する適切な指導や助言を行うことが難しく、いわゆる「指導と評価の一体化」の実現をよりよく展開することが難しいという課題を有していた。

そのような中で本校は、2013年度から学校所有のICT端末の貸与による一人一台の端末環境を整備するとともに、2017年度からは学校が指定する端末を各家庭が購入することによる一人一台の端末環境(BYOD:Bring Your Own Device またはBYAD:Bring Your Assigned Device)に取り組んでいる。これによって、ワークシートへの記述による課題を克服するための手段を得ることができるようになった。

### 3 本年度の研究

#### 3.1 社会科における研究の方向性

本校の研究総論(以下、「総論」とする)では、全国的な学力調査のCBT化検討ワーキンググループによる最終まとめ(2021)に示されたCBTの利点に基づいて、①何を問うのか、②どのような形式で問うのか、③即時自動採点は可能か、④総合的に見てCBTに親和性があるか(なじみやすいか)、という4つの観点を重視する<sup>5)</sup>。

また、2において課題として指摘した「指導と評価の一体化」の実現をよりよく展開するための方策に関する検討を行う。

#### 3.2-1 ①「何を問うのか」及び「何を問うのか」という課題に関してCBTに親和性はあるのか

社会科における資質・能力を鑑みたとき、上述の通り「究極のねらい」は、「公民としての資質・能力の基礎」を育成することである。「公民としての資質・能力の基礎」は、資質・能力の3つの柱である「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」から構成されている。また、この「育成すべき資質・能力の3つの柱に基づいた目標や内容の再整理を踏まえて、観点別学習状況の評価の観点」として「『知識・技能』、『思考・判断・表現』、『主体的に学習に取り組む態度』の3観点」が示されている<sup>5)</sup>。

本研究では、このCBTによる状況の把握が「3観点のどの観点を問うものなのか、あるいはその観点によってCBTとの親和性があるのかを検証する」ことが求められている<sup>5)</sup>。

そこで社会科では、これまでの研究の経過等を勘案し、「思考・判断・表現」を検証の対象として、実践を積み重ねることとする。特に「思考・判断・表現」に関わる学習活動では、生徒による記述を求めることが多い一方で、ワークシートを活用した実践には限界があるということは、上述の通りである(詳細は2を参照)。また、生徒による記述は、文章で長く表現されることが多く、現在活用するGoogle WorkspaceにおけるGoogle フォームの自動採点の機能を活用することが難しいと考えた。そのため社会科では、「③即時自動採点は可能か」については、文章記述を除く方法での実践を行い、検討するものとした。

#### 3.2-2 ②「どのような形式で問うのか」及び「どのような形式で問うのか」という課題に対してCBTに親和性はあるのか

本研究は、「思考・判断・表現」を評価するために、生徒による文章で長く表現されることが多い記述を対象とすることとなる。そのため社会科では、総論で例示された出題形式のうち、「記述式」での出題によって実施することとした。

### 3.3. 記述式に基づいた資質・能力の評価における難しさ

記述式でのC B Tを実施した際に懸念される資質・能力の評価の難しさとして、情報量が膨大なものとなり、その把握や評価が困難なものになってしまう点がある。本研究では、膨大に蓄積されてしまう情報をどのようにして管理・活用するのかについて、「データの複製や加工が容易である」という強みを最大限活用するような実践を展開することが必要になる。

### 3.4. 「指導と評価の一体化」の実現をよりよく展開するための方策

#### 3.4-1. 本校社会科で育成を目指す資質・能力の整理

本校の研究協議会での協議を経て、各教科等で育成を目指す資質・能力について、「資質・能力整理シート」として作成した(表1)。なお、各資質・能力については、現行の学習指導要領及び「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料にて整理されたものを参考にして作成した。

表1 「資質・能力整理シート」

整理	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
1	【地理】我が国の国土及び世界の諸地域に関する地域の諸事象や地域的特色の理解	多面的・多角的に考察する力	よりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に追究、解決しようとする態度
2	【歴史】我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえた理解	【地理】位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域などに着目して	多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史を愛する態度
3	【公民】個人の尊厳と人権尊重の意義の理解	【歴史】時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりに着目して	多様な生活文化を尊重しようとする態度
4	【公民】民主主義、民主政治の意義の理解	【公民】現代の社会生活と関連付けて	国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとする態度
5	【公民】国民生活の向上と経済活動との関わりについての理解	複数の立場や意見を踏まえ公正に選択・判断する力	国民主権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を圖ろうとする態度
6	【公民】現代の社会生活及び国際関係についての理解	思考・判断したことを、趣旨が明確になるように内容構成を考え、論理的に説明したり、それらを基に議論したりする力	各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合おうとする態度
7	【公民】社会的事象について、個人と社会と		

また、授業時では、該当単元での目標を生徒に一覧で示すと同時に、どの場面で評価を行うかを資料提示及び説明を行うことで、育成を目指す資質・能力について共通理解を図った。

#### 3.4-2. 主に学習改善に用いる評価としてのC B Tの活用

今年度3年生社会科では、授業開始後の5分程度を毎時間Googleフォームで作成したC B Tを実施した。内容は前回学習を行った範囲について、知識・技能に関わる部分を出題した。なお、解答については短答式(図1)・選択式(複数回答ありも含む)(図2)を中心に作成した。これは、授業開始後の短時間の中で生徒が解答しやすく、かつ、C B Tの長所である即時自動採点の機能(即時性)を活かすためである。C B T実施の目的は、生徒の学習内容の理解度を測り、全体的に定着が十分でないといわれる内容について、補完し定着に繋げるためである。また、解答後のフィードバックには、それまでの授業で授業者が使用したGoogleスライドの該当ページへのリンクやNHK for schoolなどの解説動画のURLを貼り付けてあり、生徒自身のペースで、学習内容の振り返りや補完に活用できるようにしている。

具体的な事例として、図1及び図2を以下に示す。図1は、短答式の例と選択式(複数完全回答)のものである。左側の短答式では、「冷戦」という単純な語句を問う問題であるため、C B T実施時点での正答率は80%を超えていた。一方で右側の選択式(複数完全回答)では、「朝鮮戦争」に関わる説明として、適切なものを選択肢から全て選ぶこととした。この時、正解の選択肢を選ぶことができる生徒は多かったが、全ての解答を選べた生徒は1名であった。とくに、朝鮮半島のどの領域をどの国が占領・支援したかという

点について、正答を選ぶことができた生徒が少なかったため、フィードバックのスライドを参照しながら、授業内で再度解説を行った（図2）。

図1

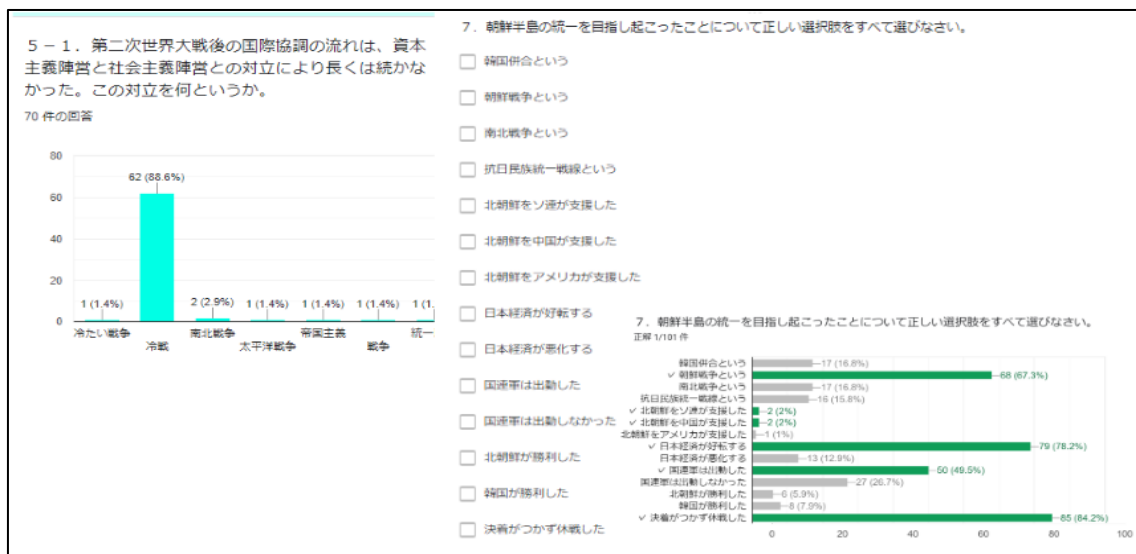


図2



また、後日実施した、定期テストにおいて、CBTで正答率が低かった、本問に関わる部分を次のように出題した。「次の文がどのように誤っているか説明しなさい【朝鮮半島は、北緯38度線を境にして、ソ連が占領した南側には大韓民国が成立し、アメリカが占領した北側には朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)が成立した。】」この時の正答率は76%となり、理解度の上昇に役立ったと言えるのではないだろうか。

### 3.4-3. 主に評定に用いる評価としてのGoogleフォームの活用

3年生社会科では授業後の学習のまとめをGoogleフォームで送信し、それら内容を授業者および生徒が蓄積することを実践してきた。蓄積した内容は、その単元に設定した「単元を貫く学習課題」に対する生徒の考えであり、思考・判断・表現の資質・能力に関わる部分を蓄積している。前項と同じくこの取り組みにおいても、Googleフォームを使用しているが、本項での取り組みを「CBT」としなかった理由は、テストとしてではなく、生徒の学習成果物としてフォームの送信結果を扱ったためである。理由は2点あり、1点目はこの時に収集する内容は、生徒による記述が中心であり、文章で長く表現されるものとなる。したがって自動採点での採点に困難さがあるだろうという予想からである。もう1点は今回このように収集した内

容と同等の資質・能力を、実際に自動採点を含むC B Tの形式にして測るためのよりよい方法はないのかを模索するためである。

## 4 研究実践例

### 4.1 公民的分野「国民生活と政府の役割」

本単元は、政府（国・地方公共団体）が経済活動において果たす役割や意義、財政及び租税の役割などについて、国民の生活と政府の役割について関心を高め、課題を意欲的に追究する態度を育成することを主なねらいとしている。また、本単元において、育成を目指す資質・能力は、下表の通りである。

観点	単元の目標
知識・技能	・社会資本の整備、公害の防止など環境の保全、少子高齢社会における社会保障の充実・安定化について、それらの意義を理解することができる。
思考・判断・表現	・市場の働きに委ねることが難しい諸問題に関して、国や地方公共団体が果たす役割について多面的・多角的に考察、構想し、表現することができる。 ・財政及び租税の役割について多面的・多角的に考察し、表現することができる。
主体的に学習に取り組む態度	・国民の生活と政府の役割について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わりようとする事ができる。

また、本単元では、「単元を貫く学習課題」として「次の政策案に対する、あなたの考え（A：賛成、B：条件付賛成、C：反対）とその理由を論述しなさい。政策案：2025年4月1日から、消費税率を25%に引き上げる」を設定した。

生徒は、授業者が作成したGoogle スプレッドシートの入力フォーマット（図1）に、この学習課題に対する自らの考えを、「単元前」「毎時間の最後」「単元後」に入力した。また生徒は、入力後に自らの入力内容をコピーし、web を活用したテキストマイニングを行い、その結果として表示されたワードクラウド（テキストデータを視覚化した図）を、入力フォーマットに貼り付けて表示することとした（図2）。また、ファイルをグループ内で共有することによって、それぞれの入力内容を踏まえた議論を展開した。

図3

図4



### 4.2 歴史的分野「現代の日本と私たち」

本単元は、第二次世界大戦後の諸改革の特色や世界の動きの中で新しい日本の建設が進められたことについて、諸改革が日本の社会に及ぼした変化や冷戦体制下の日本と世界との関わりから、考察し、表現する力



を育むことをねらいとしている。また、また、本単元において、育成を目指す資質・能力は、下表の通りである。

観点	単元の目標
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・冷戦、日本の民主化と再建の過程、国際社会への復帰などを基に第二次世界大戦後の諸改革の特色や世界の動きの中で新しい日本の建設が進められたことを理解できる。</li> <li>・高度経済成長、国際社会との関わり、冷戦の終結などを基に、日本の経済や科学技術の発展によって、国民の生活が向上し、国際社会において日本の役割が大きくなってきたことを理解できる。</li> </ul> →主に小テストや定期テスト
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現することができる。</li> <li>・現代の日本と世界を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現することができる。</li> <li>・歴史と私たちのつながり、現在と未来の日本や世界の在り方について、課題意識をもって多面的・多角的に考察、構想し、表現することができる。</li> </ul> →主にGoogleフォームのまとめ、単元末の課題
主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の日本と世界について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとしている。</li> </ul> →主に単元末の課題

本単元では「単元を貫く学習課題」として「日本が戦争から立ち直ったのはいつと言えるか」を設定した。生徒は各単位時間終了後から、次の授業時間までに、この単元を貫く学習課題に対する考えを、Googleフォームに入力・送信することを毎時間行う。なお、生徒がまとめる内容は、各単位時間で学習した内容の中から、日本が戦争から立ち直っていく過程において重要であると判断した事象を選び、その事象を「政治」「経済」「外交」「国土」「生活文化」の5つの視点のうち、どの視点とから関わるかを考え、そのように判断した理由を100字以内で記述させるものとした(図3)。生徒が送信した文章は、授業者がその内容を1～3点(C・B・Aの評価)の点数をつけて返却する。その記述内容を評価した結果、1点(C評価)にあると判断した生徒にはフィードバックのコメントをつけて返却をしている(図4)。これにより、次の時間以降の記述内容や視点に磨きがかかるように取り組んでいる。また、生徒自身も授業者が配布したワークシート(Googleドキュメント)に自らの記述内容をコピー&ペーストし、その単元で考えてきた内容が手元に残るようにしている。(図5)

図5

4-1. 今日学習した内容のうち、「日本の立ち直り」に関わって、あなたが注目した \_\_\_\_\_ / 0 歴史的な事象はなんですか。端的に書きなさい。

経済の復興を重視した占領政策に変化したこと、サンフランシスコ平和条約

個別にフィードバックを追加

---

4-2. 今日学習した内容のうち、「日本の立ち直り」に関わって、あなたが注目した \* \_\_\_\_\_ / 0 歴史的な事象は、以下のどの分野に当てはまりますか。(複数回答可)

政治面

経済面

外交面

国土面

文化面

その他: \_\_\_\_\_

個別にフィードバックを追加

---

✓ 4-3. 今日の学習内容と、日本の立ち直りについてあなたの考えを書きなさい。 \* 3 / 3 (具体例を示しつつ100字以内)

サンフランシスコ平和条約により、連合国(一部を除き)との関係が回復した。また、GHQの方針転換により経済の復興を重視した占領政策に変化したので、これらもって経済が復興するのではないかなと思った。

図6

✗ 4-3. 今日の学習内容と、日本の立ち直りについてあなたの考えを書きなさい。 \* 1 / 3 (具体例を示しつつ100字以内)

東京オリンピックが行われたことで日本が世界的に対等に見られるようになるから。

回答別のフィードバック

例えば、外交という視点を選びましたが、諸外国はオリンピックを通して「どのように」または「なぜ」対等に見られるようになったのかを説明してみましょう。

図7

単元を貫く学習課題 ～日本が戦争から立ち直ったのはいつと言えるか?～						
種	政治	経済	外交	国土	生活・文化	その他
1	問: あなたの考える「日本が戦争から立ち直った状態」とは、どのような状態ですか。単元開始前にその考えを書きなさい。					
2	答: アメリカなどの支配下でなくなり、経済的に余裕が出た状態。					
3	問: 日本の中で新しい政治の仕組みが築かれ、立ち直りに向かって行こうとする様子がうかがえる。また、GHQに命令される形で憲法を内閣したため、国議院の占領から解放されているのではないかなと思った。					
4	問: サンフランシスコ平和条約により、連合国(一部を除き)との関係が回復した。また、GHQの方針転換により経済の復興を重視した占領政策に変化したので、これらもって経済が復興するのではないかなと思った。					
5	問: 外国と条約を結ぶなどで関係が改善し一部の国土が返還されたことから、日本は立ち直りに近づいていると思える。しかし、返還された国土は一部のみであり、各国と日本の間にはまだ問題があった。					
6	問: 交通網が発達したことで色々な行事が開催され経済が成長・(東京市輪で)外国との関わりも増えるとともにたくさんのお客が訪れたことで人々の生活はより豊かになっていったのではないかなと思った。					
7	問: 考え方の均質化によりぶつかり合いが減って国がまとまりやすくなり、様々なものの普及により国内の経済格差が小さくなり中流意識をもつようになったのではないかな。また、人々の暮らしはより快適になったと思う。					

## 5 成果と課題

研究実践例 4.1 の成果として、以下の 2 点が挙げられる。

1 点目は、ワークシートによる実践では、記述された内容の交流が、基本的に当該生徒と授業者との間に限定されることが多く、他者との協議などによる多面的・多角的な考察の実現について、紙というメディアのもつ限界を克服することができたことである。具体的には、Google スプレッドシートの活用によって、ファイルを他者と共有することが可能になり、ワークシートと比較してより広範な他者の介入が可能になるとともに、他者による評価が展開できるようになったことで、授業者による指導と評価の一体化に向けた取り組みがより加速することとなった。

2 点目は、ワードクラウドの活用によって、授業時間中に生徒の入力内容の概要を視覚的に把握し、評価することができるようになったため、授業時間中に改善を求める具体的な指導を行うことが容易になった。

また、研究実践例 4.2 の成果として、以下の 2 点が挙げられる。

1 点目は、授業冒頭の CBT の使用についてである。これについてはその長所である「即時性」を十分に生かし切ることができると言える。もちろん、出題の方法や内容は今後も実践を重ねる必要があるが、学習内容の理解度の把握とその結果に対するフィードバックが即時行えることの効果は大きいものと考えられる。従来 PBT で実施してきた振り返り小テストにおいても、採点時間とその後の分析に時間をかければ行うことができることではあるが、その時間と手間を大きく省ける点は大きな利点である。

2 点目は Google フォームでの学習成果物の収集についてである。こちらについては、単元を通しての生徒の思考の過程をみとることや、多面的・多角的な視点から考察する力を高めていくことができたと考えられる。特に、フィードバックのコメントの活用は紙ワークシートの使用と教師の点検による時間差を埋める上でも大きく役に立ったと言える。

一方、研究実践例 4.1 の課題として、以下の 2 点が挙げられる。

1 点目は、生徒による入力タイミングの精選である。ICT を活用した CBT によって、これまでのワークシートに比べて、生徒の表現する機会をより多く設定することができるようになった。特に研究実践では、単元を貫く学習課題に対する考えの入力をすべての授業時間で実施した。しかしこれによって、収集された情報が膨大なものになってしまうため、「集めて終わり」になってしまうおそれが懸念されると感じた。そのため、実施しやすい手段であるからこそ、実施するタイミングに明確な根拠を持ち、精選していくことが必要であると考ええる。

2 点目は、ワードクラウドとして表示される図が入力内容のすべてを表現しているわけではなく、あくまでも授業者による評価の一助とするべきであるという点である。今後こうした手段が多様化していく中では、授業者がやるべきこと・授業者にしかできないことを明らかにした上で、どのようにコンピュータを介在させるのかという点を明らかにすることが必要であると考ええる。

また、研究実践例 4.2 の課題として、以下の 2 点が挙げられる。

1 点目は、CBT と文章記述の出題をどのようにマッチさせるかという点である。思考・判断・表現に関わる出題であれば、複数の選択肢を設定して思考・判断を要する方法をとることも可能ではある。しかし、どうしても文章で記述された内容から資質・能力を見とろうとするならば、授業者によるチェックが不可欠となる。しかしこれだと、CBT の長所を存分に生かし切ることができるとは言えない。

2 点目は、これまで記述の中で見とろうとしてきた、思考・判断・表現の項目を、短答式や選択式などの CBT に適した方法で見とる方法を練る必要があるということである。こちらについては、これまで以上に

生徒に身に付けてもらいたい資質・能力を一層吟味し、それらを的確に測ることのできる問いを精選することが、今後も引き続き必要であると考えている。

## 6 おわりに

本研究に関する社会科としての研究実践の蓄積はまだ十分ではない。すでに個別・具体の知識に関するC B Tの有効性や簡便性は幅広く理解されているところであるが、社会科が「暗記教科」という誤解を受けることがないよう、C B Tが積極的に展開されていく中であるからこそ、今後も思考力、判断力、表現力等の育成に資するC B Tの在り方を検討していきたい。

(文責 郡司 直孝, 山下 尚也)

<註>

- 1) 『中学校学習指導要領解説 社会編』 p. 25
- 2) 『中学校学習指導要領』 p. 20
- 3) 『中等教育資料 平成 29 年 8 月号』文部科学省, 2017 年, p. 36
- 4) 前掲 3) , p. 38
- 5) 北海道教育大学附属函館中学校 令和 4 年度研究総論, p. 10 (暫定)